

## (2) 教育学部・大学院教育学研究科における授業改革の試み

### —実践的指導力を培う図工・美術科教育の授業—

美術教育専修 辻 泰 秀

#### 1. はじめに

教員養成学部の学生が教育現場に足を運び、実際に子どもたちとふれあう経験を積むことは、学生の実践的指導力を培う上で大切である。従来から学部の3年生で小・中それぞれ4週間の教育実習を実施しており、子どもの実態を把握したり授業展開の方法を身につける場になってきた。そこには、普通の大学生活では見られない真剣な眼差しで取り組んでいる学生の姿がある。実践に際して材料や用具の準備・教材研究・指導案の作成などが求められ、授業では予想とは異なる子どもたちの反応に戸惑うこともある。大学で話を聞くのと実際に自分がやってみるのとでは大差があるが、苦労した分だけ得るものがあるし、教育実習がきっかけで教師になろうと自覚する学生も少なくない。

このような教育実習の成果を認めながらも、3年生の特定の時期に集中的に現場経験をするのが良いのかという問いかけをしている。教師としての資質や力量の形成という視点からすれば、1～4年生、さらに大学院までの長期にわたって継続的に子どもたちとかかわり実践の経験を積むことが有効である。

筆者は学部の2年及び3年生を対象とした図画工作科教育法や美術科教育法の講義を担当している。そして、この講義の前や同時期に教育現場において図工・美術科や総合学習の授業に参加する機会をできるだけ多く設けるようにしている。学生は子どもたちと一緒に学習することで、どのように支援していったらよいのかという課題意識をもつ。そして、子どもたちと共に造形活動をするという目的が明確になれば、教材研究の内容が具体的になる。また、3年生で熱心に教育実習に取り組んでも、それ以降に子どもたちと接する機会がないと、教育実習から得た反省や課題を生かしていく場を失うことになりかねない。

そのため、教育現場と連携をとり4年生以降でも教育実践に基づく研究を深めていける環境を整えるようにしている。3年生の実習では、教育現場での指導方法を習得することで精一杯で、子どもの興味・関心に応じて教材づくりをしたり授業改善に取り組むといった教科指導の専門性を高める段階にまでいっていない。教育実習後も教科内容についての研究を深めるとともに、子どもたちに積極的にはたらきかけていく姿勢をもちつづけることで、実践的指導力が高まるはずである。

#### 2. 学部の1・2年における実践の機会の位置づけ

学部の2年生の後期までは教科教育法の講義を担当する機会がないが、1年生の教養セミナーの一部や時間割の合間を利用して、美術教育講座の学生が図工・美術科教育について理解するよ

うにしている。図工・美術科の教師になるにあたって、1・2年生のうちに子どもたちの造形活動の様子を知り、大学において何を学習すべきかという展望をもてるようにしたい。

まず、事前指導としてプリントやビデオ映像などの資料を活用し、これまで学生が担当した実践の概要や子どもたちの活動の様子を紹介する。大学生といえども小・中学生の頃の図工・美術の詳細については忘れている。美術を専攻する学生の日線から子どもたちの活動や作品を見てしまいう傾向があるが、描いたりつくったりする行為を率直に楽しんだり、発想を広げることにおいては、改めて子どもの姿に学ぶべき点も多い。

ビデオを通して内容を知ったり、試作をしたりすることで、子どもたちの造形活動の追体験をする。そして、機会を見つけて学校や社会教育施設に出掛けて実践に参加をする。学生たちは、ビデオなどによって実践に関心をもつようになっているが、それ以上に目の前で造形活動を見たり支援にかかわることで、体験的に理解が深まる。

学部の1・2年生の段階を観察実習の期間とする大学が多くなっている。観察実習では学生たちは教室の後ろや周囲から子どもたちの様子や教師のはたらきかけを見ている。ところが、学生は子どもたちと一緒に話をして遊んだりする中で子どもたちの実態を知ったり親しみをもつ。そこで、場面によっては観察しているだけでなく一緒に活動に参加したり、教師と学生、学生相互のチーム・ティーチングを取り入れることがある。

1・2年生の学生は経験不足で教師として一人歩きをする状態にはなっていないが、担当教諭の補助をする、学生が協力してチーム・ティーチングに参加する、現場の教諭と大学教員が連携をして学生たちを支援するといった方法によって、学生の実践に対する意欲や関心は高まる。図工・美術科では一人ひとりの個性を生かした支援が求められており、学生がチーム・ティーチングに加わることで、個の表現方法や内容に対応することも可能になる。チーム・ティーチングに際して、事前・事後の打ち合わせをする中で実践への意欲が引き出され、教師をめざそうとする学生の意識が次第に芽生えてくる。

### 3. 実践の場の広がり

1～4年生、さらに大学院の期間を通して子どもたちとのふれあい体験をする機会をもつために、二つの場を設けている。一つは、地域の小規模の小学校での実習であり、もう一つは、土・日曜日などの活動である。

地域の小規模校は、1クラス15名から20名位で、学生が一人ひとりの子どもたちとかかわるには都合がよいし、各学年の担任の先生方ともコミュニケーションをもちやすい。地域の小学校では大学生が教育実習等で訪ねてくることがまれである。それだけに、学生と子どもたちとの交流が新鮮なものであるし、学校をあげて歓迎して下さる場合が多い。自然環境や伝統文化など地域の特色を生かした実践にふれる機会にもなる。

ただし、現在の教員養成学部のカリキュラムは、教員免許状取得のために密に詰まっており、通常の大学の授業時間帯に学外に出掛けるだけのゆとりを見いだすことは容易ではない。そこで、土・日曜日にワークショップというかたちで、子どもたちと交流する場を設けている。現在は学校週5日制が完全実施されており、学校休業日の子どもたちの過ごし方が着目されているが、塾通いか家で漠然と過ごすといった二極化が進んでおり、本来の学校週5日制の意義が達成されて

いるわけではない。そのような子どもたちをめぐる生涯学習や社会教育の見地から、地域における体験の場を造形ワークショップとして位置付けている。そして、学校休業日における子どもたちを対象にした講座のスタッフを大学生が中心になって担当している。

大学の教科教育法の授業との関連からすると、小学校における授業実践の方が妥当性があるし、学校の先生方の協力を全面的に得ることができる。学校休業日における公民館としての活動は、教材内容や時間を自由に裁量するゆとりがあるので、学生たちの創意工夫を反映しやすい。したがって、いずれかに重点を置くというよりも、学校・地域・家庭の連携を基盤にした様々な実践をしていくことが望まれる。

このような学校や社会教育施設での実践では、学生間の協力が必要である。1年生だけ、2年生だけだと子どもたちと接したり教材づくりの経験が少ないので限界がでてくる。そのようなときに通常の教育実習を経験している3・4年生がいると、学生間の連携が進展する。1・2年生は3・4年生から助言を得ることができるし、3・4年生はリーダーシップをとったり経験を伝えることで自分自身を高めることにつながる。教育実習とは違う学校・学年・学級の子どもに対応することで新たに気づく内容も多い。そのため、1～4年及び院生を含めた異学年の連携によるチーム・ティーチングを取り入れている。4年生や院生になると、しだいに実践の企画と運営をするコーディネーターとしての力量が身についてくる。

大学生が学年をまたがって教材設定・試作・材料や用具の準備・展開の工夫し、そこに学校教諭や大学教員などが加わることで、ティーチングスタッフ間の学びあいが成立する。また、小規模校の子どもたちは、子ども相互の交流の幅が狭まるし、地域以外のいろいろな年代の人々と接する機会にも恵まれない。大学生によるチーム・ティーチングは、子どもたちの社会性を広げる一助になっている。「以前は担任の先生に聞く程度であった。ワークショップをするようになって、大学生や地域の人々などいろいろな人に気軽に質問をしたり助力を依頼できるようになった」という子どもたちの姿が出てきた。

#### 4. 実践までの道筋

大学の講義に加えて学校や社会教育施設において実践にかかわる場合に、おおよそ次のような取り組みを行っている。

##### (1) 日程の調整

複数の教職免許状や資格の取得のために学生の授業時間割は満たされており、教育現場に出掛けることは移動時間を含めるとかなり難しい。けれども、何とか美術教育関連の講義の1～2回を現場での教育実践にあてることは可能である。午前中の大学の授業終了後に移動すれば、小学校の5・6時限に間に合う。そのため5・6時限を図工・美術科の授業にさせていただくときもある。せっかく学校に行くからには校長先生や担任の先生と教材研究や授業の振り返りをする機会になるので、学生にも時間を空けておくように調整する必要がある。

校長・教務主任・担任といった学校側の都合や、受講学生一人ひとりといった全ての関係者の予定を見ながら、しかも継続して教育現場での実践研究を行うことは、日程調整や連絡だけで結構大変である。「忙しくても学校に行って子どもたちと接することが大切である」「子どもたちや学校の先生方から学んだことを自分の学習にいかしていく」という意志を学生がもつことが前提

になる。地域の子どもたちへのはたらきかけの意味が理解できないと、当初は「何時までですか」「なぜ学校に行くんですか」という率直な質問が出ることになる。

予定を組むにあたって、半期や年間を通したものを作成する。ただし、学校を訪問し実践にかかわるには、タイミングが影響する場合が多い。先生方と情報交流しているときに「次にこんな内容の授業ができないか」という発案があったり、「今、こんな活動をやっている子どもたちも大変熱心に取り組んでいます」とかいった話が出てくる。その際に、次年度に考えますといった対応ではなく、できるだけ熱気が伝わってくるうちに学級を訪問したり、学生がかかわれるようにすることが大切である。時間を逸すると、子どもたちの盛り上がり（興味・関心）が異なってきたりする。1～2年たつと学級が変わったり中心になっている先生が転勤されたりして、二度と実践ができなくなってしまうときがある。そのため、協力校の各学年の状況を把握するようにして、教材開発や授業実践の情報やタイミングを把握し柔軟に対応をしたい。

## (2) 授業観察と交流

教員養成学部に入學してきたからといって、学校の状況をよく知っているとか、教師になろうとする強い気持ちをもっているわけではない。学生が自分たちで教材研究をしてチーム・ティーチングに加わる状態にすることが望まれるが、まず学校の雰囲気や子どもたちの様子を知る姿勢が求められる。そこで、学部1・2年生に学校を訪問する機会を幾度かもつ。そして、造形を伴う活動を通して子どもと一緒に話をしたり遊んだりするようにしている。

1・2年生段階の学生は、授業を受ける側の意識があり、教材を準備したり学級全体の子どもたちに話をするといった教師の仕事を経験したことがない。また、今の子どもたちも自分が生活していた小・中学校とき同じだと思い込んでいる傾向がある。したがって、まさに目の前にいる子どもたちの活動の様子を見たり、教師として教える立場の一端を経験できればと考える。

現場を知ることにおいて、授業観察や参観は意味のあることである。ただし、教室の後ろにいて静かに子どもたちを見つめる行為に終始するだけでなく、子どもたちとのふれあいをもちたいと考える。子どもたちにとっても、学生にとっても印象に残るものは「いっしょに話をしたり遊んだ」とかいった体験である。教室の後ろにいる学生は子どもたちとさしてかわりをもつことができないが、一緒になって学習活動に取り組んだとか、汗を流して運動したという身体的な体験を大切にしたい。

こうした子どもたちとの活動を通して教師のおもしろさや子どもの実態を把握することは、大学内ではできないことである。地域の小学校に行くと、子どもたちが「先生」とか「お姉さん」といって話しかけてきたり肩に飛びついてくる場面に出会う。そのような子どもとの交流がきっかけとなって、教師になることを意識したり、より一層子どもたちのためになる教育活動に参加しようとする学生が一人でも多くでてくることを期待する。

## (3) 教材研究に取り組む。試作をしたり、材料や用具を準備する。

自分自身が表現者の立場になり造形活動の楽しみを実感するという意味で、大学での実技は大切である。ただし、専門教育をそのまま子どもたちに提示することは困難であり、子どもの実態を考慮したい。子どもたちと接した経験の少ない学生たちには、まず図工・美術科の教科書を基

本に考えるようにしている。教科書にはいろいろな内容が含まれ、子どもたちの活動場面の写真等も記載されている。そこで、教科書の内容や教材の多様性について知り、子どもたちの興味・関心にあっているとか、ぜひ子どもたちと一緒に活動してみたい内容を選択することから始める。

造形活動を伴う実践では、事前に材料や用具を準備する。材料や用具のもつ魅力によって、子どもたちの造形意欲が引き出される場合が多いからである。たとえば木工のワークショップでは、地域の製材所や大工さんの協力を得て木片や板材を収集して、子どもたちが材料を手にとって表現の方法や内容を考えることができるように、体育館の中央に山盛りの材料を準備するときがある。学校の教材カタログに記載されているセットでは、材料が一様であり子どもたちの表現が画一化・類型化しやすい。木片や板材の廃材は形やサイズが異なるので、子どもたちが造形的な発想をめぐらすには好都合である。紙の関係の工場でも、不要な和紙・ボール紙・ダンボールなどの在庫がある場合がある。汚れがあったり裁断間違いであったりして商品としては不向きでも、子どもたちの造形活動には、絶好の材料になる。四つ切り画用紙だけでなく、大きな画面を準備したり、自在に切ったり組み合わせたりすることで、子どもたちの造形意欲が引き出されるはずである。

#### (4) 実践にかかわる。ティーム・ティーチングに参加する。

学生が実践的な力量を培う上で、ティーム・ティーチングへの参加は有効である。3年生の教育実習の場合には、一人で学級全体を教えることができるようになることが目標になっており、ティーム・ティーチングを前提にしていない。ところが、図工・美術では、子ども一人の個性を伸ばすことをめざしているにもかかわらず、一斉指導をすることで精一杯で、個への対応が不十分になる場合が多い。

一人ひとりの造形表現のよさを読み取りそれぞれの持ち味を生かすような支援が望まれるが、熟練した教師でさえ実行することは難しい。けれども学生スタッフが多くいれば、子ども一人ひとりにまで目がいきとどきやすいし、子どもたちが自分で材料・用具・表現方法を選択したとしても、支援するだけのゆとりが生じてくる。ティーム・ティーチングによって、子どもたちは個性に応じて具体的な支援をうけることができるし、学校の教諭も一人だけでは手がまわらない個別指導が可能になる。

学生による実践では、子どもたちとの出会いを大切に、子ども一人ひとりに声をかけたりして積極的にはたらきかけていく姿勢が求められる。慣れない学生の場合には、子どもたちから話しかけてきたときには対応する。ところが、静かで内気な子どもや反抗心が見られる子どもをそのままにしておく傾向がある。むしろ、集団から離れて一人になりやすい子どもほど着目するようにしたい。

#### (5) 実践を振り返る。

自分では一生懸命やっても、思い通りに展開できない状況も多い。実践の結果を「うまくできた」「難しい」といった簡単な言葉で片付けてしまう学生がいるが、丁寧に振り返り次への糧にしていきたい。特に粘土・木工・版画などでは材料や用具の後片付に時間をとられ、当日にミーティングをもてないことがある。けれども、実践の日に近ければ、子どもたちの様子や実践

した内容の記憶が鮮明であるので、当日か一週間以内に実践に関する協議をする場を設けている。仮に多くの改善事項が出てきたとしても、早期であれば継続して実践ができるかもしれない。

振り返りの会では、展開・子どもへのはたらきかけ・子どもたちの反応・作品などについて、感想や今後の課題を述べあう。話し合う中で、共通の課題が見えてきたり自分が気づかなかった視点を他のスタッフから提示されることがある。学生スタッフはもちろん、学校関係者（校長や担任等）、大学関係者（教科教育担当や教科専門担当等）、地域教育担当者（公民館長や生涯学習担当者等）といったいろいろな立場や経験の方にもできるだけ参加していただく。学生だけでは解決できないことについて適切な助言が示されるはずである。

もちろん、中には厳しい口調での指摘や意見をだされるときがある。その際に「せっかく一生懸命やったのによい評価をしてもらえなかった」「どうせ教師には向いていない」といった早合点をする学生がいるならば残念である。学生たちの今後の努力や奮起を期待しているからこそ、本音で語ったり学習課題を具体的に提示されている。わずかの実践経験で改善されない内容でも、学部の4年間や大学院で力量形成をしていく意欲をもって欲しいと考える。

## 5. まとめ—教育実践研究の発展—

かつては教育実習は4年生の前期に位置付けられており、教員養成学部におけるまとめとしての役割をもっていた。3年生に各教科の教育法をはじめとした教職科目を学習し、それをもとにして4年生の実習に臨むかたちであった。ただし、4年生の前期は就職対応の多忙な時期であるため、3年生のうち小・中の教育実習を済ますことになり定着している。3年生の主に9月に中学校、11月に小学校の教育実習をするようになってから5年以上が経過しているが、実習校からの評価も概ね良好である。

これまでの状況からすると、教育実習の後に特別な機会を設けなければ、教職に就くまで1年間以上子どもたちとふれあう場面がない。卒論や修論に際しても小・中学校の教育実践に関する研究について取り組み、引き続き教育現場に足を運ぶといった進展が望まれる。たとえば、17年度には、草木染めを研究テーマにした学生を中心にして、小学校において草木染めの実践をした。子どもたちと学校周辺の自然素材を収集したり、草を煮て染料をつくったりするうちに、スタッフの相互協力ができきたし大学生自身の体験学習にもなった。また、教育実習を通して鑑賞教育の重要性を感じた学生たちは、岐阜県美術館において本物の美術作品を活用して子どもたちを対象にした鑑賞教室を実施し、小学校でも鑑賞教材の実践を試みた。事前に美術館に出向いて打ち合わせをしたり、作品や図版をもとにシナリオを作成したりして熱心に取り組み、実践を通して鑑賞教育の在り方を検証しようとした。

このように、通常の実習を限定的にとらえるのではなく、卒業研究や大学院における実践研究へと発展することができる。そして、子どもたちの実態に即しながら教材研究・実践・振り返りといった活動が繰り返し行われる中で、実践的指導力を高めていくことが可能になっている。

# 美濃 児童と大学生 共同で紙工作



岐阜大の学生と紙を使った作品を作る小学生ら。美濃市常盤町の古川工房で

## お面や帽子、カバンに創意工夫

美濃市内の小学生と岐阜大学教育学部の学生が和紙を使って共同で工作をする「美濃紙ワークショップ」が十九日、同市常盤町の古川工房であった。

教師などを目指す学生が、ものづくりを通して子どもたちとのふれあいを実践的に学ぼうと企画した。同大学の美術教養講座から学生約二十人、市内の小学校から児童約四十人が参加した。テーマを設定せず、「紙を使って何ができるか」をみんなで考えながら作るワークショップ形で、▽お面▽服、帽子、カバン▽はり絵▽オブリ

エーの四班に分かれて製作を開始。児童らは学生に助言をもらいながら、作品を仕上げた。

資料1 学校休業日における学生の教育実践。コーナー制による紙工作のワークショップ。  
(中日新聞 2001年8月21日 中濃総合版)

## アート満開

岐阜市鷺山の鷺山小学 初めに体育館に集ま校で、ビニール袋を用いり、赤やピンク、緑などで造形作品をつくる「親子ふれあい教室」が開かれた。

教室は岐阜大の辻泰秀 助教授（美術教育専門）とゼミの学生三十人を迎

えた。出前講座。辻助教授は、県教委が設置した「地域教育力・体験活動推進協議会」の会長で、土曜日の有効活用方法を検討しており、今回の教室もその一環。三年生二クラスの子供と母親ら百三十人が参加した。

### 巨大バルーン誕生

岐阜市 鷺山小 ビニール袋で造形

会場を移し、ビニール袋を張り合わせた直径十メートルほどの巨大アドバルーンを持ち上げに挑戦。扇風機で空気を送り込んで膨らませたアドバルーンがふわりと浮くと、児童や親から「すごい」と歓声が上がった。



巨大アドバルーンの前で大はしゃぎする児童＝岐阜市鷺山、鷺山小学校

資料2 学生と大学教員による小学校での「出前授業」。カラーのビニール袋で服をつくったり、巨大バルーンで遊ぶ。  
(岐阜新聞 2004年6月26日 岐阜地域版)